

# 教養学会年報 第10号

2018年3月発行

---

関東学院大学人間環境教養学会主催講演会

## 「『永遠の隣人』 —日本と中国がお互いに理解できるように—」

講師 段 躍中 氏（日本僑報社編集長）

司会 山田 留里子

日時 2017年7月6日（木）13:15～14:45

場所 関東学院大学金沢八景（室の木）キャンパスE1号館502教室

（司会） 本日は、遠いところ、暑い中をお越しいただきまして、誠にありがとうございました。本日は関東学院大学人間環境教養学会の主催で、段躍中先生の講演会となりました。段躍中先生のプロフィールを少しご紹介させていただきます。

1958年に中国の湖南省でお生まれになり、その後、中国の有力紙である中国青年報で編集者などを担当なされて、1991年に来日されました。その後2000年に、新潟大学大学院で博士号を取得されて、1996年から日本僑報社でご活躍されています。日本僑報社はご存じだと思いますが、刊行書籍300点を超える書物を出版されている、大きな出版社です。2005年から日中作文コンクールなどを主催され、若い青年の、日中友好のための人材を育成されていらっしゃると伺っています。また、日中交流研究所の所長をされ、北京大学の特約研究員もされていて、いろいろな方面で活躍されている先生です。

今日は、「永遠の隣人—日本と中国がお互いに理解できるように—」という素晴らしいテーマを掲げて、お話ししていただきます。最後の方に少し質疑応答の時間を持っており



ますので、しっかりお聞きになられて、何かご質問があれば大歓迎いたしますので、よろしくお願ひします。それでは、段先生、お願いいたします（拍手）。

皆さん、こんにちは。今日は、初めて関東学院大学で皆さんと交流できることを、とてもうれしく思います。特に山田先生をはじめ、大学関係者の皆さんに、心からお礼を申し上げます。ありがとうございます。

今日は、若い学生諸君だけではなく、地元の大先輩の皆さん、特に山田先生のお連れで、私の事務所にもお越しいただきました伊井健一郎先生をはじめ、元共同通信の記者古野さんもいらっしゃっていて、大変恐縮です。地

元の日中友好団体の皆さんにもお越しいただき、本当に感謝しています。私の話はあまり面白くないので、なるべく短めにして、質疑応答の時間を多めに取りたいと思います。今日は、先輩の皆さんや若い学生の皆さんの方で、失礼なところもあるかと思いますが、お許しください。よろしくお願いします。

### 1. 日本生活25年を振り返る

日本に来て、もう25年になります。正確に言うと26年目です。若い学生諸君の年齢より長く、日本語を26年間勉強しましたが、まだ日本語は駄目で、十分に表現できないところもあるかもしれません。一部、中国語を交えた説明もあります。中国語を勉強している方も多いと聞きましたので、少しでも皆さんの参考になればと思います。

ご存知のとおり、今年は日中国交回復45周年です。若い学生の皆さんには、多分、お父さんの年齢が40代、50代の方が多いと思いますが、日中国交回復前の中国に対する日本人の皆さんのイメージ、印象、親近感は、現在と比べてどれくらい差があるでしょうか。昨年9月の調査では、何と9割の皆さんが、中国に対してあまりいい印象を持っていません。これは本当に残念です。さかのぼって45年前は、8割ぐらいがいい印象でした。今は逆転しています。それが私たち日本に住んでいる中国人はとにかく残念で、とても心が痛いです。今日、私は、日中両国が永遠の隣人であり、永遠に友好的に付き合っていくなければならないということを中心にお話ししたいと思います。特に、私の日本での活動を中心に報告させていただき、幾つか提言も申し上げたいと思います。

2015年から、中国人の訪日旅行客が一氣

に増えました。今年は800万人に近くになるのではないかと思います。それから、日本にいる中国人も、もう100万人です。今、この教室に座っている皆さんの頭上で、何千人の中国人、日本人が日中の空を飛んでいます。1日約2万人以上は飛んでいます。池袋に行くと、石を一つ投げたら何人かの中国人に当たります。池袋に行けば、日本語を使わなくても大丈夫です。私が来るときに調べてみたら、金沢八景は、私のふるさと湖南省の瀟湘八景が由来だそうです。日中両国は、歴史的にも文化的にも、いろいろつながりがあります。

今日は、若い諸君の中にも、中国語を勉強していらっしゃる方が多いと聞きましたが、中国の日本語学習者も100万人で、世界で一番多いです。残念ながら、今、中国に行かれる日本人の方は300万人もいないかもしれません、300万人來ていたときもありました。その後、だんだん減ってきて、去年は200万人で、今年はもっと減るかもしれません。ただ、今は45周年のまだ半分ですから、上半期はもっと頑張って、もっと盛り上がって、来ていただきたいと思います。

日本人の対中親近感がますます下降している中で、われわれは行動するしかないと思っています。どのような行動かということを、私の体験を中心に皆さんに申し上げたいと思います。いくら日中関係が良くなくとも、親近感が下がっているといつても、行動しなければ何も変わりません。一人一人、政治家の役割もあれば、われわれ民間人にもそれぞれ役割があります。メインの行動は四つです。一つは、本の出版です。もう一つは、先ほど山田先生にも紹介していただきましたが、中国の若者向けに日本語作文コンクールを開催

しています。もう一つは、中国語サークル「漢語角」の創設です。そして、日中翻訳学院の設立といった四つです。

### 1-1. 友好の歴史を記録して一日中相互理解にプラスになる書籍を刊行

では1番目、私は25年間、本当に多くの皆さんのおかげで、日本での生活、仕事、教育、勉強がうまくできました。幸せに感じています。私は1991年に日本に来ましたが、その当時は33歳で、三つのゼロからスタートしました。まず、日本語はゼロ、会話の勉強をしたことがありませんでした。それから、そのときは日本と中国の格差はもっと大きくて、1日の仕事で中国人の1カ月の給料に相当することに、日本に着いた後、大変驚きました。それから、唯一知っている日本人は、30年前に中国の電車の中で出会った太刀川さんでした。

本当に、あっという間に日本で25年になりましたが、日本に来るときは、なるべく荷物をたくさん持っていました。なぜかというと、日本の物価が高いからです。8月に飛行機に乗ったときも、なるべくたくさんの服を着て、重さがオーバーしないぎりぎりまで持っていました。それから、今も持っていますが、鍋も持っていました。鍋は何のために持ってきたか、若い方は多分分からだと思います。皆さん、中華料理は好きだと思います。横浜の中華街は有名です。でも、私が持ってきたのは、まんじゅうを作る鍋です。日本のまんじゅうではありません。中国の馒头（まんとう）です。日本のまんじゅうは中身がありますが、中国の馒头（まんとう）は中身がなく、普通の小麦粉で練って、それを蒸した蒸しパンのようなものです。妻に言われて、日本の

米は高いけれども小麦粉は割安ということで、万が一食べていけないときはまんじゅうを作ろうと。自分が食べると同時に、売ってもいいですから、そのようなことを考えて大きな鍋を持ってきました。今も使っています。宝物です。

中国人のハングリー精神で、日本のよさを生かして、日本で頑張っていくことを決意してきましたが、私が初めて日本に来て1日目に、非常に驚くことがありました。成田空港から巣鴨駅に着いて、改札口に行ったら、両替した1万円、パスポート、財布を入れた黒いカバンが手元になくて、ホームで妻に電話したときに、緑の電話ボックスの上に置いたのではないかと思って、慌ててホームに戻ったら、電話ボックスの上に、まだ黒いカバンが置いてあったのです。それが、私が日本で初めて驚いたことです。カルチャーショックです。信じられませんでした。いつでも、どこでも、このエピソードを皆さんに紹介しています。これが、私の受けた初めての日本でのショックで、それで思い出したのは、中国の「道不拾遺」（道に落ちているものは拾わない）と「夜不閉戸」（夜、ドアを閉めなくとも眠れるということ）ということわざです。これほど素晴らしいところはない、半年ぐらいたつたら、完全に日本で生活していくぞうだと感じました。

もちろん、その前にいろいろな苦労をしました。日本語を全く知らなかったので、アルバイトの面接に行っても、相手に何を言われても「はい」としか返事ができなくて、店長は「この男は日本語ができない」ということで、どこも採用してくれませんでした。唯一、上野駅構内のお店の杉山さんというおじいさん、おばあさんが、「この男はまじめそудし、

日本語ができなくても、皿洗いの仕事は大丈夫だろう」と、採用してくれました。

上野駅構内で1年ぐらい頑張って、オーナーの杉山さんは、仕事も一生懸命やりながら、暇なときに、何とアルバイトの私に日本語を教えてくれたのです。1年ぐらいいたったときに、私は読売新聞の1面の記事、約1000文字を全部すらすら読みました。それを杉山さんはすごく喜んで、私の大好きな焼を作ってくれて、ごちそうになりました。これが、私が日本で感じた日本人の優しい心です。このような人々のおかげで、今まで来られました。

それから、私が日本語を勉強する方法の一つ、中国語を勉強している皆さんにも参考にしてほしいと思うのは、毎日、短くても、日本語で日記を書くことです。私は日本語がうまくなくても、問題意識はしっかりあったので、日本の新聞にどんどん投書をしました。1992年8月15日の読売新聞に掲載された投書のタイトルは、「外国人留学生の記事、明るい面も報道して」というものでした。日本の新聞では中国の問題も取り上げているので、在日中国人のマイナス面も、たくさん社会面に掲載されました。自転車を盗んでも、ゴシックタイトルで大きく取り上げるのが日本のマスコミです。そのような問題も含めて、日本で頑張っている中国人や外国人がたくさんいるのに、あまり取り上げないという問題意識を、私は日本語がうまくなくてもとにかく新聞社に投書しました。編集者はお金の要らない日本語の先生です。

その後、東奥日報、山陽新聞、新潟日報、広島の中国新聞など、いろいろな新聞に、全国のあちこちに行ったときに、その地元で感じたことを日本語でまとめて、投書しました。

トータルで約200本の原稿を出しました。その後、修士論文、博士論文も書きました。皆さんの税金を使って、出版助成金を180万円も頂いて、本も出版させていただきました。この場を借りて、皆さんに感謝を申し上げたいと思います。

自分が一番やりたいのは出版、ジャーナリズムでした。中国ではあまりできない仕事が日本での仕事になりました。最初に新聞を作ったときも、日本語で在日中国人の活躍を日本社会に発信するというのが、私の宿命ではないかと思いました。

そのため、初めての本は1998年の『在日中国人大全』という本ですが、この本は約1000ページあって、6年間かかって、救急車で2回運ばれました。そのときに初めて知りましたが、日本の救急車は、お金が要らないのです。素晴らしいことです。

この本は、おかげさまでNHK、共同通信、朝日新聞でも取り上げられました。この1冊で中国人のイメージも大きく変わると、情報を発信しながら皆さんと中国とのつながり、特に中国に対する理解を促す役割を少しは果たせたのではないかと思います。日本で、このような出版物を通して、日中交流に少しでも役立てていることに、とても感謝しています。

先日、私の娘がアメリカのUCバークレーに行ったとき、偶然、図書館で『在日中国人大全』を見つけて、驚いて、うれしくて、写真を撮ってくれました。本には足がありませんが、世界のどこにでも行けます。今まで、多分20カ国ぐらいの大きな図書館に、僕報社の本、私が作った本が収蔵されました。特にアメリカの国会図書館には結構あるようです。当社が寄付したものではありません。ア

メリカ国民の皆さんのお金で買ってくださったものなので、本当にうれしいです。

## 1-2. 日本語作文コンクールを主催-中国人の日本語学習を応援する

中国人の日本に対するイメージは、日本と比べれば、まだいい方です。特に若者の中には、日本が好きな人、日本文化が大好きな人がたくさんいます。私は、中国でもっと日本のファンを増やすため、2005年から、日本語作文コンクールを開催してきました。日中関係は、結局、人間関係です。日本に来られなくても、日本の方が大好きで一生懸命日本語を勉強している中国の若者を、もっと応援しなければなりません。彼らは日本への留学経験がなくても、ペラペラの日本語を話せます。後ほど録画を見せますが、これは本当に、日本の若者も学ばなければならないことです。このような感じで13年間、既に3万人以上の応募者が参加してくれて、約2000人の学生が受賞して、受賞作品集も12冊出しました。このような若者たちが、なぜ日本語を勉強して頑張っているのか知っていただきたく、短いですが、NHKの報道をご覧いただきたいと思います。

### \*\*\*ビデオ上映\*\*\*

(アナウンサー) 中国で日本語を学ぶ学生が、日本のアニメやマンガをテーマにした作文を披露する催しが北京で開かれ、学生たちは、「アニメやマンガが、友情や勇気、平和の大切さを教えてくれた」などと、熱く語っていました。

(学生) 「アニメが大好きです。私に諦めない心や、友情の素晴らしさを教えてくれました」。

(アナウンサー) 中国では毎年、東京に拠点

を置く出版社が、中国人の学生を対象に日本語の作文コンクールを行っていて、今年は日本のアニメやマンガなどをテーマに募集し、各地から4000点余りが寄せられました。昨日は、北京で入賞者の授賞式が行われ、このうち上位の5人が、作文を暗記してスピーチしました。最優秀賞を受賞した上海の大学に通う姚麗瑾（よう・れいきん）さんは、次のように語りました。

(学生) 「小さなことから努力すれば、きっといつかは中日関係が良くなると思います。『ガンダムSEED』のラストのように、永遠の平和を祈ります」。

(学生) 「私の身の回りの人は、日本のACGや音楽などが好きです。だから、その文化の力を通じて、どのように政治関係を改善するかが、私たちの課題になるかもしれません」。

\*\*\*ビデオ終了\*\*\*

皆さん、どうですか。驚くべきことです。昨年、最優秀賞を受賞した学生は、日本語を勉強して4年で初めて日本を訪問しました。今年の2月に日本に来て、日本人の温かさや親切さ、日本の民主、自由であることを体験してもらいました。

まず、スポンサーのドン・キホーテに行きました。ドン・キホーテは素晴らしいです。今、ドン・キホーテのお客さんは中国人ばかりで、今はカード払いだけではなく、携帯での支払いもできるようになっています。24時間営業ですから、中国人はどんどん買い物に行きます。

その後、江田五月先生を表敬訪問をしたり、新華社の記者からインタビューを受けたり、それから、東芝の本社にも行きました。東芝は本当に偉いです。このような時期でも、東

芝国際交流財團は応援してくださっています。夜は外務省幹部との夕食会で、在中国日本大使館の前公使が汐留の素晴らしいレストランで食事会を開いてくださいました。翌日は、小田原外務大臣政務官、丹羽元中国大使にもお会いして、議員食堂で昼食を頂きました。日本の政治家がどのようなものを食べているかを体験したのです。驚きました。大体みんな1000円以内の定食で、偉い政治家でもそのような昼食を食べていることに感心しました。

ちなみに、民進党の近藤昭一先生は、北京语言大学の元留学生で、中国語がペラペラです。公明党の西田先生もペラペラです。政治家の中で中国語を話せる方は10人ぐらいですが、最も優秀なのは近藤先生と西田先生です。それから、二階幹事長も中国が大好きで、いくら忙しくても若者が来たら必ず会います。夜は程永華大使や、元国連事務次長の明石先生、ノーベル賞受賞者の大村先生ともお会いました。福田先生も、毎年恒例で、若者が来たら必ず応援してくださいます。福田先生は一般的のあいさつだけではなく、若者の進学、これからどのようなところへ行くか、日本と中国の交流にどのように貢献するか、いろいろアドバイスしてくださいます。若者たちは、このような偉い人たちとの交流を通じて、中国の若者に伝えていきます。本当にすごいです。

東京大学の高原先生は、このコンクールの顧問で、彼に東大の食堂で学生食を食べさせてもらいました。NHKの番組にも生出演したあと、鳩山先生のところにも行きました。それから、若手経営者たちの私塾である「島田村塾」を開かれている島田先生にもお会いました。島田先生は70歳から中国語を勉

強して、今は「夜來香」(イエライシャン)など中国語の歌を幾つか歌えます。自民党の高村先生も、いつもお忙しいところ、時間を作ってくださいます。

朝日新聞社も、私のメディアパートナーです。東京華僑総会や藤崎前駐米大使を訪ね、神田神保町にある周恩来さんも食べたことがある老舗中華料理店も体験して、最後の締めくくりとして「日中教育文化交流シンポジウム」に参加して、堂々と自分の意見を日本語で発表しました。素晴らしい若者です。元重慶総領事の瀬野先生の自宅でホームステイも体験しました。この1週間を通じて、中国の若者が感じた日本は、信じられないほどの暖かさ、優しさ、親切さでした。彼には特別な体験かもしれません、彼の体験を通じて日本のイメージ、日本の素晴らしいところが中国に伝わっていくと思います。

### 1-3. 中国語サークル「漢語角」創設一顔が見える新しいスタイルの交流を推進

中国語サークル「漢語角」は、毎週日曜日、西池袋公園で活動していて、雨にも負けず風にも負けず、今月30日に500回、10周年を迎えました。中国語ができる方は、日本人の中でも多くなっています。このような、お金も要らない、予約も要らない、誰でも参加できるサークルはいいです。私は10年前、Yahoo!で「漢語角」を検索したら、1件の情報もありませんでした。そのため、池袋に引っ越してきた私は、自分の会社の近くにある公園で、民間交流のステージ、場を作らなければならぬということで活動しました。このような交流の場で、日中両国の皆さんが話し合って、交流して、友達として知り合って、この10年間、本当に頑張りました。

13年前は、日本人向けの中国語作文コンクールも6年間やりました。6冊の本を出しましたが経済力が足りず、毎年続けるのは難しいため、お金の要らない交流の場を作りました。1回目は友達を誘って23人来ましたが、今は完全に定着して、多いときは100人以上、少ないときでも30~50人ぐらい来ます。93歳のおばあさんも参加していて、彼女は人民日報を10数年読んできました。あまり話すことはできませんが、中国が大好き、中国語も大好きで、今もたまに来ます。元気です。雨のときは、私の事務所の狭いところで活動します。日本人だけではなくて、世界の人と交流していて、既に10カ国の方が参加しています。経歴も外交官、大学の先生、サラリーマン、元政治家という人もいます。

2番目に浦和にも作りました。小平、広島、鹿島、横浜にもあります。横浜の「漢語角」は既に5~6年になります。名古屋にもあり、今、全部で10カ所ありますが、もっとたくさん作りたいです。これは私一人の力では到底できないので、今日いらっしゃる皆さんの支援も必要です。このような交流は、日中両国の皆さんのが本当に見える交流で、とてもいいスタイルだと思います。今、日中友好協会という伝統ある団体は、若者たちをどのように取り込むかと工夫しています。このような活動は多分、若い方が参加できるのではないかと思います。

たくさんの報道もありましたが、皆さんぜひ、このような形で、日本でもっと多くの活躍できる場、特に中国人と交流できる場を作ったらいいと思います。ちなみに私は、日本で「漢語角」を作った後で、今、中国で「日語角」というような形も推進しています。宮本大使が在任中に「日語角」という3文字を書



いてくださいましたが、中国では今、「日語角」という形で、日本と交流できるスタイルが全国で15カ所くらいあります。

政府はいがみ合っていても、われわれ民間は交流しなければなりません。腹を割って、face to faceの交流をすること、草の根交流、草の根友好が大事だというのが私の主張です。それについて、東京新聞が去年取り上げてくれたときも、本当によく書いてくださいました。Twitterでも60回以上リツイートされて、とてもうれしいです。ぜひ、そのときの動画をご覧ください。

### \*\*\*ビデオ上映\*\*\*

(アナウンサー) 多くの中国人が暮らす東京池袋で開かれている日中の草の根交流会が、昨日300回目を迎え、中国大使館の外交官らも出席して、記念の式典が行われました。

この「日曜中国語広場」は、日中友好の活動をしているNPO法人が、多くの中国人が住む池袋駅近くの公園で毎週開いていて、日本人と中国人が交流する場として進められています。これまでに1万2000人が参加し、300回目となった昨日、記念式典が行われました。中国大使館の鍾濱軍(しょうしんぐん)一等書記官も出席し、「日中関係が悪化したときでも交流が続き、日中間には固い絆があ

ると改めて感じた。これからの中日関係のより良い関係に向けて取り組んでもらいたい」とあいさつしました。

(男性)「お互いに話し合うのが、僕は一番の中日友好だと思います」。

(男性)「交流ができた、お互いの理解が深まることは本当にうれしいし、これからも続けていけばいいなと思います」。

\*\*\*ビデオ終了\*\*\*

これは300回目のときの様子でした。

「漢語角」と同時に出版翻訳のハイレベル人材を育てています。今は翻訳の人材も足りません。そのため、私は2008年から武吉先生を中心に、中国語から日本語に翻訳できる人材をこつこつ育てていきました。9年間で300人ぐらい勉強してくださって、そのうちの約1割、30人ぐらいは単行本も出しました。それと同時に、もう一つ、日本語から中国語に訳すというコースもあり、これも中国人を中心ですから、日本のいい本をもっと中国に紹介できたらという目的で、今、頑張っています。

毎日新聞社が発行している「サンデー毎日」という雑誌では、日中両国は絶対に戦争してはいけない、われわれ民間が阻止しなければいけない、そのため民間が手を組もうという長い記事を書いてくれました。若者たちの声をもっと育てて、もっと発信しなければいけません。

今取り組んでいるもう一つを紹介します。中国に留学された日本人は、山田先生もその一人ですが、何と1962年から始まって、もう22万人以上です。皆さんは知らないと思いますが、22万人という数はすごいです。今年、私たちのところで、体験談や忘れられないエピソードを募集したら、わずか45

日間で、全国40都道府県と、中国、アメリカから93本の素晴らしい原稿を寄せてきました。これから毎年続けて、両国の体験談をまとめて、一冊の本として刊行していくたいと思います。

特に今回の反響がすごかったのは、皆さんの中国に対する思いです。感動しました。何十年たっても、中国に対する思いが熱い。ある方は、夫婦で雲南大学に留学されて、もうご主人は亡くなっています。留学時代に書いた日記を奥さまがまとめて、応募してくれました。感動の物語です。小さいかもしれません、皆さんの中の心のどこかにあるかなと思っています。来年は、もっと多くの方の作品を収録して、続けていきます。

そういう活動をしていたら、ある方が私のブログにコメントを残してくれました。「中国留学ではありませんが、中国駐在のエピソードがたくさんあります。そのようなものは募集しませんか」と。そのため私は、来年からは中国滞在経験のある方からも、忘れられないエピソードを募集しようと考えています。

総括して申し上げると、この25年、大変苦労しましたが、日本でしかできない仕事ができて毎日感謝しています。今日も、関東学院大学の素晴らしいキャンパスを見て、都心より随分静かで緑が多く、空気もおいしく感じて、感心しました。皆さんが今日、参加してくださったことにも、とても感謝しています。

このような仕事は日本でしかできないと、私はいつも思っていますから、このような企画力、行動力、発信力は必要だと思います。特に今のスマホの時代、インターネット時代では、発信は誰にでもできます。

## 2. 日中相互理解に関する提言

### 2-1. 日中の市民の取り組みをもっと発信しよう

日中相互理解ということで、特に、民間交流という立場でSNSを使ってほしいです。今日、山田先生に聞いたら、まだWeChatを使っていないということで、少し残念です。すぐ使ってほしいです。中国8億人の皆さんと交流できる、世界一大きい交流ツールです。中国人との交流には欠かせません。なぜかといえば、今、中国にはいろいろな制限があって、GoogleもFacebookもTwitterも使えません。唯一、どこへ行っても中国人とつながれる、中国人と交流できるのはWeChatしかありません。8億人と言いましたが、もうすぐ10億人を超えることは間違ひありません。

中国では今、どこへ行っても、携帯1台あれば財布は要りません。つい先日読んだ日本の新聞記事で、中国人が電車の中で財布をなくしても1週間も気付かなかったというのがありました。なぜかというと、財布を使わなくなってきたからです。屋台で何か買い物をしたり、食べ物を買ったり、電車に乗るときも全てWeChatで支払うので、携帯1台です。そのためWeChatは絶対にお勧めです。日本語版もあります。

日本人旅行者の石井さんが中国の湖南省に行って、100元札でお茶を買いましたが、店の人はおつりを渡し忘れて、99元多く受け取ったことが、当日の夜、精算のときにやっと分かりました。石井さんはもう湖南省を離れてしまったのですが、遠い日本におつりを、多めに取ったお金を返したいということで、私のWeChatを見つけて、私の携帯に99元が振り込まれました。私は現金で100元札を彼

に渡して、彼が1元札を返し、99元が彼に戻ったのです。

石井さんは二つのことに驚きました。一つは、なぜ中国の携帯がこれほど素晴らしいのか。もう一つは、中国の若者のモラルが良くなっていること。彼はどこへ行ってもこのエピソードを自ら手を挙げて必ず発言します。日本に戻っても、日本人によく紹介してくれているのです。

私はこのエピソードに感動して、すぐに写真を撮って、自分のWeChatとマスコミに発信して、あちこちに投稿しました。やはり、一人一人が発信者になっている時代です。新聞記者は、昔、大きな役割を果たしていました。今も役割を果たしていますが、ただ、メインは市民、われわれ一人一人が主役という時代になってきたのです。

私は立教大学のすぐそばに住んでいます、立教大学のキャンパスは私の家の裏庭だと思っています。そのため、毎日感謝の気持ちで、立教大学の素晴らしい1年間の風景や行事を中国人に発信しています。立教大学のボランティアの広報部員になっているのです。関東学院大学の留学生の皆さんも多分発信していると思いますが、このようなときには本当に便利で、中国の皆さんに日本を知つてもらうために、WeChatが一番いいと痛感しています。



す。

私は日々、日本人向けや中国人向けの四つのサイトを使っていますが、同じ原稿を投稿すれば、一番影響力があるのがWeChatだということは間違ひありません。昔はweibo(ミニブログ)がすごかったですが、現在はWeChatが圧倒的です。今、8億人ですから、あっという間に10億人が使うようになるでしょう。

一つの事例を申し上げます。中国の有名なプロガーたちが書いた、日本を旅したときの率直な思いが本になっています。この本は本当に素晴らしいで、皆さんが読んだら感動し、感心すると思います。中国の皆さんには、このように日本を見ています。例えば、皆さんは日々、ゴミを分別しています。月曜日と木曜日は生ゴミ、資源ゴミなど、小さいことかもしませんが、中国人はそれに感心しています。街角の緑や、それぞれの家の前の生け花にも感心しています。

## 2-2. 中国の「日本語の日」創設

それと同時に、中国で活躍している日本人の先生が、中国の「日本語の日」設立を目指して頑張っています。私たちは毎年12月12日に、中国の日本大使館で表彰式を行っています。そのため、中国では「日本語の日」を設立して、これを目指して頑張っています。写真は去年の表彰式です。12月12日は記念日と考えています。

## 2-3. 日本の「中国語の日」創設

日本では8月8日に「中国語の日」を設立しようと頑張っています。設立できたら、その日は、日本人の皆さんと中国語をしゃべって、中国人の友人を自宅に招いて、一緒に飲

子でも作ろう、中国の本を読もうというイベントをやってもいいかなと思います。

### 2-4. 読書で日中相互理解を深めよう

私は数年前から「日中友好読書運動」を呼び掛けられています。伊井先生は素晴らしい本をたくさん訳されていますが、どのように普及するか、どうやってもっと多くの方に読んでいただかうか。元共同通信記者の古野さんも、『紹興日記』という素晴らしい留学時代の本を書かれています。

やはり本を読まなければ、人間は大きく成長できません。しかし、特に今、日本の本屋ではある光景が見られます。たまたま私がTwitterで、成田空港で日本人が投稿したツイートを見つけたのですが、中国批判の本が沢山売れているのです。「売れている本=いい本」ではありません。これは私の感想です。「売れていない本=悪い本」でもないということです。私たちも頑張らなければいけません。

## 3. 拙文と推薦図書

2002年、日中國交回復30周年のときの本『永遠の隣人』には、中国の人民日報が取り上げてきた日本の有名人を載せていました。田中角栄さんが中国に行かれたときの写真も、この中に全部収録されています。鄧小平さんが日本に来られたときの新幹線のエピソードや、福田康夫先生のお父さまの写真も載っています。この写真のおかげで、そのときまだ官房長官の時代に、福田先生と付き合い始めたということです。天皇陛下が中国を訪問されたときのエピソードや、いろいろな日中友好、日中両国民の心温まる話ばかり、600ページもある厚い本です。そのときの出版パー

ティーで大使があいさつをして、推薦文も書いてくれました。そのときは日中友好記念行事の一つとしてやっていただきました。

最もお勧めしたいのは『新中国に貢献した日本人たち』のセットです。後藤田正晴先生が亡くなる直前、絶筆といわれたのは、日中友好会館館長の時代、最後の推薦文です。日中友好の原点は、この2冊です。これを皆さんにお勧めします。

やはり、われわれは日中両国には友好の歴史が圧倒的に長くて、戦っていた悪い歴史はわずかです。このようなことを必ず覚えていただきたいと思います。われわれが頑張れば、間違いなく日中両国のいい時代が、またやってくると思います。

ご清聴ありがとうございました(拍手)。

## 質疑応答

(司会) 先生、どうもありがとうございます。先生の25年にわたる魂の交流、日中友好の歴史をお話しいただき、本当に感謝の思いでいっぱいです。これから約20分の時間を利用して、質疑応答に入りたいと思います。せっかくですから、先生にご質問したい方がいらっしゃれば、手を挙げてください。どなたでも、何でも構いません。よろしいですか。

(Q1) 日本人の良いところ、悪いところ、中国人の良いところ、悪いところについて、先生の25年の感想を伺いたいと思います。例えば私の場合、中国に2年間いたことがあります、中国の人たちは非常に、特に若者は積極的で、どんどん日本人の席に近づいてきます。それで親しくなり、仲良くなっている意欲がうかがえる人が多かったと思いま

す。日本の若者は、どちらかというと引っ込み思案で、積極的にならない面があったかなと。これは一例です。私の感想ですが、先生は日本人の長所、短所を、どのように見ていらっしゃいますか。

(段) ありがとうございます。難しい問題なので、簡単には答えられません。私の体験から申し上げると、日本人は几帳面、まじめ、何でも丁寧ということは、先ほども指摘されたように一つの長所だと思います。私は、日本人向けの中国語作文コンクールを6年間開催しましたが、日本人の丁寧さは、どのように評価されるかというと、自分が満足しない作文は出さない、応募しないということです。その代わり中国人の若者は、とにかく挑戦します。日本語があまりできなくても、練習するつもりで書くため、受賞しても連絡が取れない中国人も結構います。日本人は何でも几帳面にまじめに書きますが、その代わりハングリー精神、挑戦する精神が足りません。恥ずかしがります。特に中国語を勉強している若い方は、間違ってもいいから話してほしいです。中国人をつかまえたら、とにかく、しつこく、中国語を練習すればいいと思います。

私は、日本人は素晴らしいと感じます。私は特別かもしれません、出会った日本人は、みんな優しく、温かい方が多過ぎて、数え切れないほどです。私が初めて出会った日本人の太刀川さんは、わずか1回、電車の中で会っただけです。そのときはロサンゼルスオリンピックで中国のチームが初めて金メダルを取ったため、私が安徽省を取材に行き、帰りの電車の中でした。

そのとき見た日本人旅行團の一行が、すごく面白かったのは、フィルムの白いケースを

お猪口に使ってお酒を飲んでいるとき、あるおじいさんと目線が合って、お互にいい感じがあったのです。彼は中国語が分からず、私も日本語はできませんでした。ただ、二人は、とても交流したい気持ちを持って、電車が安徽省の合肥から南京に向かうわずか短い時間で、二人は友達になったのです。それが1989年まで文通も全くありませんでした。ただ、彼らは名刺をもらって、私もそのとき、何もありませんでしたが、名刺と、中国の万里の長城の切手を1枚差し上げました。彼が持っていたのは、今考えると日本の科学技術は先進的で、インスタントカメラです。

すぐ、私の写真を撮ってくれて、それを最後に、何年も連絡を取っていなかったのに、私の妻が1989年に日本に留学に行くことになつて、私は中国語で、彼に手紙を書いたのです。私の妻が今度日本に行くので、何かお願いがあるかもしれませんと。彼は新潟の長岡、田中角栄のふるさとで、妻は東京です。彼は、いきなり妻の住所に宛てて、手紙と2万円の現金を同封してくれて、驚きました。そして、新幹線の駅で、夫婦二人で、大きな文字で妻の名前を書いて、駅のホームでずっと待っていました。その一幕は、今も忘れません。

日本人には丁寧な方、優しい方が本当に多過ぎます。逆に、先ほど紹介した若い中国の方のモラルは良くなっていますが、残念なことに、中国の経済発展と同時に、またいろいろな問題点が生じています。そのため、日本人の皆さん方が中国に行かれると、怖いと思われるかもしれませんと、私が日本の皆さんにアドバイスしているのは、中国語が分からなくても全然大丈夫、「ニーハオ」「謝謝」(シェシェ)「再見」(ツァイチエン)の三つ

を覚えて、温かい、優しい心を持っていけば、中国人と友達になりたい気持ちがあれば、中国のどこに行っても全然大丈夫ということです。

これが私の思う日本人の良さであり、日本人は、もっと積極的に中国と付き合ってほしいと思います。

(司会) ありがとうございました。先生のお話、とてもよかったです。この中でも、実は中国語を学んでいる大学生がたくさんいます。少なくとも、先生が言われた「ニーハオ」「謝謝」「再見」という言葉は、皆さん覚えていると思いますが、もし学生の中で質問したいことがあれば、この機会に質問してもらおうと思っています。今日は、実はこれは中国語の授業で、その一環としての講演会ですので、ぜひ誰か質問していただければと思っています。ずっと私の顔を見ている学生がいるので、当てていきます。お願いします。

(Q2) ニーハオ。先生は25年間、日本にいたとおっしゃっていましたが、逆に、この場にいる日本人に向けて、中国に関して自慢できることはありますか。

(段) たくさんあります。先ほど申し上げた中国人のチャレンジ精神は、多分、今、日本の数倍です。日本人の皆さんで中国に留学する人は、年々減っています。ちなみに、中国で一番留学生が多い国は、韓国です。6万人の韓国の若者が中国にいます。それから、ハーバード大学のアメリカ人学生たちは、わずか1~2年ぐらい中国語を勉強して、日本人の中国語がペラペラの、北京大学に留学している日本人がハーバードに研修に行ったときに、

自ら挑戦してくるのです。アメリカ人の若い学生が、「君は日本人で、中国語がうまいと聞きましたが、われわれと中国語で勝負しましょう」と。そう言って挑戦してくるのです。彼は日本の雑誌にはっきり書いています。私も非常に勤で、幾つかの大学で教えていますが、彼の文章を読んで、何回もコピーして、日本の若者に読ませました。皆さんも読んでください。

世界の一番重要な、大きい国アメリカが、日本人に対する挑戦を、これほどやっています。アメリカの若者は今、中国政府も応援して年間10万人が留学しています。アメリカにいる中国人は500万人です。

そうすると、皆さんどうしますか。中国が自慢できるのは、人口、文化、深い歴史、特に伊井先生が今やっている昔の中国の思想、文化。皆さんは、今からでも全然間に合います。中国に行けば、1年、2年、3年あれば、私の日本語よりはるかに話せるようになるでしょう。若者は、このような挑戦の精神を持って、苦労することこそ宝物です。挑戦しないと、人生はつまらない。お金持ちの息子、偉い政治家の息子はつまらない。彼らは、自分が成功したわけではありません。できれば中国語を勉強して、英語もある程度、世界のどこに行っても困らない程度に勉強して、その3カ国語ぐらいを話せれば、将来の人生は大丈夫です。

世界の流れとして、皆さんこれから中国語を勉強すれば、絶対に人生の得です。ビジネスにしても、勉強にしても、中国人との付き合いは欠かせません。中国語を習い、中国人の心を学び、中国文化を身に付け、中国人の考え方、中国の行動様式が分かれば、皆さんの人生は楽です。

(司会) ありがとうございました。中国語を頑張っていきましょう。段先生、関東学院大学には中国からの留学生も増えてきました。今日も一人、一生懸命聞いている学生がいますので、代表して質問をお願いします。

(Q3) 本日は、ありがとうございます。日本に来て25年間、先生は、日本はどのような国だと思いますか。

(段) ありがとうございます。既に、どのような国か先ほど話しましたが、もう一度説明します。まず、質問した留学生にお聞きしたいです。日本に来て何年ぐらいですか。

(Q3) 8年です。

(段) 8年日本に住んでいれば、多分、私とあまり変わらないと思います。日本は、とにかく私にとっては、自分の夢を実現できる国です。世界の幾つかの国に行つきましたが、日本ほど住みやすく、日本ほど社会主義で、日本ほど幸せな国はありません。私は中国人のお客さんに、いつも、とても分かりやすい例を申し上げています。

山手線に乗ったことがある人は、間違いなく、この中で全員と言っていいでしょう。皆さん、知っていますか。山手線の29の駅の名前が、全て漢字です。これからできる30個目の駅も漢字らしいですが、全部漢字で、中国人の誰でも読みます。

それから、皆さん知っていると思いますが、子どもを産んだら外国人でも、中国人でも、日本人でも、アメリカ人でも、誰でも区役所、市役所から補助金が30万円も40万円ももら

えます。これほど素晴らしい国はありません。  
ホームレスも旅行できます。私たちの「漢語角」には、ホームレスも参加しています。ホームレスが、新聞を読んだり、ラジオを聴いたり、テレビを見たりしています。

特に私の仕事から申し上げると、出版ですから言論の仕事です。アメリカにいたら、私はできません。なぜかというと、英語力が全然足りないからです。日本語と中国語は相似していて、すごく使いやすい面もあります。

ある人は、アメリカで夢を実現できます。ある人は、中国で夢を実現できます。私にとっては、日本でしか夢を実現できません。日本は、本当に中国の文化を大事にしてくれところで、中国人にとっては、ありがとうございます。

日本がどのような国かというのは難しいですが、私は大好きで、日本で骨を埋めるつもりで頑張っていきたいです。私の後も、ぜひ若い留学生には、もっと日本で頑張って、中日両国の架け橋になってもらいたいです。

(司会) どうもありがとうございました。アンケートなどは入り口のところで回収していますので、よろしくお願ひいたします。どうも、お疲れさまでした。

### 教養学会運営委員会

---

伊藤賀永(学会長)  
青戸泰子  
松崎政三  
太田俊己  
山田留里子  
佐野慶一郎

---

### 教養学会年報 第10号

2018年3月発行

【編集・発行】

関東学院大学人間環境教養学会  
横浜市金沢区六浦東1-50-1  
電話 045-786-7760

【印 刷】

株式会社ポートサイド印刷  
横浜市金沢区鳥浜町16-2  
電話 045-776-2671

---